

コヒブレク

♡ ちょっとしたエッセイ

パスポートからアイデンティティ（自己同一性）へ

山本貢平（小林理研）

初めて海外出張したときのことである。パスポートがなければ外国には行けないと言われて急遽作った。そこには旅券と書いてある。これを入国審査官に見せれば「携帯者が本人である」との確認がとられて入国できるという。しかし、「旅行中もこれを必ず携帯せよ」と言われる一方、「なくすと困るのでホテルのセキュリティボックスに保管し、外出中は携帯するな」と言われた。そんなに重要なものなのか？ 国内では必要がないのに、海外では何故必要なのだろうか？と疑問であった。ある人によれば「海外に出ると周囲は知らぬ人ばかりであり『自分が自分であること』を証明することはパスポート無しにはなし得ない」という。しかし、「『自分が自分であること』を最もよく知っているのは自分自身ではないのか？」と思った。その後よく考えてみると、これは「自分自身が『自分の存在』を根拠付けることができない」というパラドックスであることが分かった。つまり自分のアイデンティティ（自己同一性）を証明するのは、第三者しかないと初めて知ったのだ。このアイデンティティという術語には、広くは二つの意味があるらしい。一つは、「人格的同一性」、もう一つは「歴史的連続性」である。パスポートが身分証明をするのはアイデンティティのごく一部であり、その意味ではアイデンティフィケーションという言葉が相応しいようだ。パスポートは今流行のIDカードである。外国人はたまに「貴男のアイデンティティは何か？」と人に聞くことがある。これは非常に難しい質問だ。国籍や人種を超えて自分のアイデンティティを説明するとすれば、どう答えればよいのだろうか。例えば、敬虔なクリスチャンは「私のアイデンティティは、ジーザスクライストに由来する」と答えるという。この場合にも、アイデンティティには他者の存在が必要なのだ。もう少し俗な話に戻そう。興味深いこと

がある。「私は祖父です」というとき、「祖父」であるためには他者が必要である。この他者とは誰か？ その人の「孫」である。孫が自分の存在を根拠付ける。逆もある。これを相補的アイデンティティと呼ぶらしい。さて、国際化の時代、「あなたのアイデンティティは」と聞かれてどう答える？

♣ 私のすすめるこの一冊

「ゲーデル、エッシャー、バッハ—あるいは不思議の環」、ダグラス R. ホフスタッター著、野崎昭弘、はやしはじめ、柳瀬尚紀 訳、白揚社、1985年

河原英紀（和歌山大）

この本を読んだのは、NTTの研究所で柄にも無く部長補佐を勤めていた頃。研究の現場から距離をおかざるを得なくなったこの機会に、少し長いレンジでライフワークを考えてみようとしてだった。本書の、膨大なうんちくに飾られた入れ子になった深い階層がいつの間にか自己参照のループになっているという構造は、題材であるゲーデル、エッシャー、バッハそれぞれの『作品』の構造でもある。このような大技をはじめとして、本書には様々な仕掛けや刺激的な仮説がちりばめられている。それらの仮説の幾つかは、今でも新しい。我々が意識と呼んでいるものは、実際に行われている膨大な情報処理の結果を表面的にモニタしているルーチンの動作に過ぎないのではないかと。サバン症候群は、意識下のレベルの膨大な情報処理機構に直接アクセスしてしまう結果ではないかと。計算機が不得意で人間が得意な情報処理の本質は、刺激を受けた最初の100ms以内に行われることの中にあるのではないかと。

原著が出版されたのは、米国で人工知能の冬の時代が始まる前の1979年。この四半世紀の間の脳科学の発達には、それらの刺激的な仮説を実験的に検証が可能なものとした。本書と併せて「サブリミナルマインド—潜在的な人間観のゆくえ、下條信輔、中公新書、1996」を読み、その後の研究の展開を追うと感慨深いものがある。意識のレベルを一皮むいて出てくるのは、精緻な論理機械のレベルだろうか、それとも情報幾何学だろうか？ 問

もなく、その答えが分かる。

本書は、しかし、難しい顔をして読む本ではない。訳者のひとり柳瀬尚紀氏は、翻訳不可能と言われていた「フィネガンズウェイク」の訳者でもある。(英国の友人たちにこの話をすると「本当に訳した?!」と一様に驚く。)これらの、匠のレベルにある訳者たちが縊りあげた、原著者の遊び心も伝わってくるよくこなれた驚異的(ア苦勞スティック)な訳文を読み解くことも、本書が与えてくれる楽しみの一つである。

著者は、本書を(著者自身がそうであったような)15歳の頭のいい連中に読んで欲しいと思って書いたとのこと。学生だけではなく、若者の心を持つ方々も、日頃の専門書から離れて、この生意気な著者の『作品』とつき合ってみてはいかがだろうか。

Q&A コーナー

Q. 「MIDI には時間誤差が多く含まれるため、実験には使えない」とよく耳にしますが、MIDI を実験で用いる場合、どのような点に気をつけなければならないのでしょうか？

A. MIDI (Musical Instrument Digital Interface) は 1980 年代最初に登場して以来、電子楽器の演奏などにおいて広く一般に用いられていますが、MIDI を研究で用いる場合には注意が必要です。

MIDI で演奏を記録する場合には、様々な記録誤差が生じることを忘れてはなりません。例えば MIDI ピアノ演奏の場合、打鍵時刻の記録においては数ミリ秒から数十ミリ秒程度の不確定な誤差が生じ、また同時打鍵数が増えるとその誤差が大きくなると言われています。これは二つの音のずれを検知する最小時間差(エコー検知限という)や音の発音ずれに基づく音色知覚に関する研究で測定されてきた時間差に匹敵する誤差となります。音楽演奏において重要な項目は時間制御であることがこれまでに分かっているため、音楽演奏を記録するのにこのような時間誤差が含まれることは深

刻です。つまり、MIDI 楽器を用いて演奏を正確に記録することはほぼ不可能なのです。

MIDI を演奏に用いる場合(ここでは奏者が MIDI 楽器を操作し、その信号を MIDI 音源に送信し発音させるような使い方のこと)、前者の場合と比べて MIDI 発音に関する時間誤差が加わるため、誤差が更に加わってしまいます。例えば MIDI シーケンサで実験呈示刺激を作成し、MIDI シーケンサから直接再生するとこれらの誤差が含まれてしまうため、MIDI を実験刺激呈示装置として用いることは不適切と言えます。

では MIDI は実験に本当に使えないのでしょうか？ もちろんこれらの誤差が問題にならない程度の実験の範囲内なら構わないのですが、MIDI を用いて厳密な心理実験や聴覚実験を行うのは危険です。時間精度に関わる実験で MIDI を用いる場合、一度波形に変換してから用いるのが通常ですが、どうしても MIDI をそのまま使うのであれば、精度の測定が必要です。これまで MIDI 専用の計測ボードの開発や MIDI ドラムを用いた記録精度の測定例などが報告されていますが、まだまだ研究の途中段階と言えます。今後は研究者にとって便利な、すなわち精度がある程度確保された新しい規格が望まれることでしょう。

(三浦雅展：龍谷大・理工)

—原稿募集—

「コーヒーブレイク」欄は会員の情報交換の場として、より親しく利用していただくという欄です。内容は問いません。自由なご意見、提言や反論、質問や回答など何でも結構です。

投稿要領 10 字程度の表題、氏名、勤務先、部課名、電話番号、コーヒーブレイク欄への投稿であることを明記。本文は 22 字×40 行以内。原稿は編集委員会で検討の上順次掲載。編集委員会で手直しすることもあります。掲載は無料。投稿はなるべく e-mail でお願いします。なお、著者校正はファクシミリで行いますので、必ず Fax 番号を明記して下さい。

送付先 (社)日本音響学会編集委員会
 e-mail: LEJ02517@nifty.ne.jp
 〒 101-0021 千代田区外神田 2-18-20
 ナカウラ第 5 ビル 2 階
 Tel. 03-5256-1020, Fax: 03-5256-1022